

# モダニズムが夢見たユートピア： ドイツ田園都市建設の歴史(6)

— 理想郷ヘレラウの終焉 —

副 島 美由紀

## 1. 序

ドイツ再統一後、1908年ドレスデン市郊外に建設された田園都市ヘレラウの歴史を回顧する動きが始まり、再開発の事業も始動している。多くの研究書がドイツで出版されたことを受けて、日本でも建築史や文化史の分野においてヘレラウの名を目にする機会は増した。しかし特に日本においては専ら田園都市の理念と建設の創設期にのみ焦点が当てられ、長期的な都市の成長計画が半ばにして頓挫してしまった経緯を記述したものはまだない。しかしなぜヘレラウがその理念を堅持することができなかつたのか、その発展にどのような問題と困難があったのかを理解することは、ドイツにおける田園都市運動について考察する際に本質的な重要性を持つ。なぜなら田園都市の発展を阻害したのはインフレや戦争による損害といった付帯的な状況よりも、むしろイデオロギー的抗争や覇権の変遷であり、その意味でヘレラウに出来た困難は当時ドイツ全土で起こっていたいわゆる覇権抗争の縮図であり、さらにその困難は「あらゆる生活改善思想が最も確実かつ有益に結実する」<sup>1</sup> 場所としての田園都市の理念に本質的に起因する問題だからである。

これまで拙論(1)~(5)<sup>2</sup>において述べてきた通り、田園都市は単に機能主義的な住宅改革構想によって建設された宅地などではなく、より人間的な社会

<sup>1</sup> Schollmeier, Axel, *Gartenstädte in Deutschland*, Münster, 1988, S. 57.

<sup>2</sup> 副島美由紀「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(1)~(5)」, 小樽商科大学「人文研究」96輯~105輯, 1998~2003。

を求める進歩的実験の総合体である。よってそれは近代都市計画上の理想的モデルであると同時に「夢と記憶が複雑に作用しあったきわめて文化的・精神的な存在」<sup>3</sup>であり、実際の建設計画が挫折したとしても、そこには文化的・精神的活動の軌跡が存在している。

ドイツにおける田園都市建設に関する論考を締めくくるにあたり、本論ではその軌跡を辿りながら田園都市ヘレラウの挫折から再開の試みへ至る経緯を紹介し、さらに田園都市を回顧することの今日的意味についても考察してみたい。

## 2. 生活改革先進都市、ドレスデン

田園都市を一つの文化的な現象として捉えるとき、ドイツでの建設がまずドレスデン郊外で始まったことを認識しておく必要がある。ドレスデンは当時生活改革運動のいわば先進都市であり、新たな共同体建設の土壌としては理想的な土地であった。例えばドレスデン郊外の保養地ヴァイサー・ヒルシュでは、改革衣服や健康食に関する著書も著した医師のハインリヒ・ラーマン(Heinrich Lahmann, 1860-1905)が、すでに1888年から総合的な自然療法を施すサナトリウム〈白鹿〉<sup>4</sup>を開業していた。それは器具や医薬品に頼った従来の医学に対する批判から発したドイツで最初の自然療法サナトリウムで、特に都市生活に病んだ人々を対象に日光浴、大気浴、食事療法などの総合的体力増進プログラムを提供することでドイツ国外でもその名を知られていた<sup>5</sup>。またドレスデンの〈リヒャルト・ギーセケ書店〉は身体や肉体美に関

<sup>3</sup> 丸山純「田園都市—中産階級のユートピア」in 三宅晶子他『感覚変容のディアレクティック』平凡社、1992. S. 89.

<sup>4</sup> 正式名称は「ドクター・ラーマンの自然療法サナトリウム (Dr. Lahmann physiatische Sanatorium)」, “ヴァイサー・ヒルシュ”はドイツ語で〈白鹿〉を意味する。

<sup>5</sup> 1906年には30カ国から約7,000人にももの“患者”が訪れたと言われている。

する書籍を多く置き、1903年からは裸体主義の雑誌「美 (Die Schönheit)」の発行も行っていた。カール・シュミットを中心とした〈ドイツ工作連盟〉の事務所は第一回芸術教育会議 (1901) や第3回ドイツ工芸展覧会 (1906) 等における交流を契機としてドレスデンに設置され、さらに同市では1911年に第一回国際衛生博覧会が開催されて500万人以上の観客を集めたと言われている。この博覧会はドレスデンで香料工場を経営していた企業家カール・アウグスト・リングナー (Karl August Lingner, 1861-1916) の立案によるものだが、この成功を受けて翌年の1912年、国民の啓蒙と教育を目的とした「ドイツ衛生博物館 Deutsche Hygiene-Museum」が帝国政府によって設立される。そこでは展示物中一番人気を博した「ガラス人間」と呼ばれる透明な人体模型等を使って、健康や衛生といった概念を可視的に提示する試みがなされた。

以上のように当時のドレスデンには、文明批判、自然療法、芸術教育、住宅改革、裸体主義等、様々な主義の改革者たちを惹きつける独特の星状布置があった。その郊外に田園都市が建設されると、理想的な教育施設を持つヘレラウは青年運動の面々、特に東南ドイツに住む運動家たちに注目され、1923年にヘレラウで国際青年運動大会が開催されたとき、「ヘレラウとドレスデンは、全ザクセンの青年運動、否、そもそも国民にとっての精神的中心となるべきだ」といった声明が出されたほどである<sup>6</sup>。生活改革先進都市ドレスデンと田園都市ヘレラウは、青年運動家たちにとって都市と田園の模範的な対を成していた。しかしこのような星状布置は様々な運動の発展や協同を促すと同時に人々の集合と離散を引き起こす不安定な磁場でもあった。

---

<sup>6</sup> Sarfert, Hans-Jürgen, Hellerau: Die Gartenstadt und Künstlerkolonie, Dresden, 1992, S. 90.

### 3. ヴィグマンとダルクローズの離脱

ヘレラウが輩出した最も有名なダンサーはドイツ表現ダンスの創始者とも言うべきマリー・ヴィグマン (Mary Wigman, 1886-1973) であるが、ヴィグマンがヘレラウで学んだ時期は実は短かった。1910年にヘレラウへやって来た時23才だった彼女はすでに独自の表現への意志を持っており、自己のリズムに調和させるダルクローズのリトミックには満足できずにいた。自らソロダンスの振り付けを試みていた彼女は、ある日画家のエミール・ノルデ (1867-1956) に会う。ノルデ夫妻はこの時ラーマン医師のサナトリウム〈白鹿〉に滞在しており、ダルクローズ学校で学んでいた知人のエルナ・ホフマン (Erna Hoffmann) を訪ねてヘレラウを訪れていた。そこでエルナのルームメイトであったヴィグマンを知ることになる。ダンスに関心を持ち、よく絵の題材にもしていたノルデはこの時自宅で踊るヴィグマンに感銘を受け、後に彼女をモデルとした「ろうそくダンス」、「ダンサーたち」等の作品を残す。そしてその時同じくサナトリウム〈白鹿〉に滞在していた舞踊理論家ドルフ・フォン・ラバン (Rudolf von Laban, 1879-1958) と彼女を引き合わせるのである。ラバンの中に理想の教師を見出したヴィグマンは1913年ヘレラウを離れ、もう一つの芸術家コロニー、ラバンの拠点があるスイスのモ



E. ノルデ「ろうそくダンス」(1917)



E. ノルデ「ダンサーたち」(1920)

ンテ・ヴェリタへ赴く。その後ラバンとヴィグマンはヴァイマル時代における新しいドイツ・ダンスの興隆をリードする二大勢力となる。

ヘレラウ時代、まだ無名であったヴィグマンの周囲にいた人々を、ナチ時代に彼らが置かれた状況と合わせて想起することは、芸術とナチズムとの複雑な関係を理解する一つの助けとなるかも知れない。ヴィグマンは当時ダルクローズ学校の同級生3人と共同生活をしていましたが、彼女をノルデに紹介したエルナ・ホフマンには婚約者がおり、彼もよくヘレラウを訪れていた。ヴィグマンが強い親近感を抱いていたと言われているその男は<sup>7</sup>、後にハイデルベルク大学の精神科長となり『精神病患者の美術 (Bildnerei der Geisteskranken)』(1922)を著して有名になるハンス・プリンツホルン (Hans Prinzhorn, 1886-1933)である。プリンツホルンは精神病患者の美術作品に関心を持った最初の医師で、「この画家は精神病患者のような描きかたをする。つまり、精神病に罹っている」といった前衛芸術に関する彼の考えは人種主義者たちに注目され、ナチスによる“退廃芸術”迫害に理論的根拠を与えた<sup>8</sup>。もう一人のルームメイト、オランダ人のアーダ・ブルーン (Ada Bruhn) の婚約者もよくヘレラウへやって来ていた。当時ペーター・ベーレンスの建築事務所で働いていたミース・ファン・デル・ローエ (Mies van der Rohe, 1886-1969)である。ナチスが政権を取った翌年の1934年、ブリュッセル万博のための設計図がヒトラーの不興を買ったためにファン・デル・ローエはドイツでの活動を禁止され、結局アメリカ亡命を決意する。同じ年ノルデはナチ党に入党している。にも拘らずノルデの作品は1937年に「退廃美術展」が開催された折り“退廃”の烙印を押され、彼はその後国内亡命を余儀なくされる。ヴィグマンらそれまで公的支援と縁のなかったダンサーの大半は、集団舞踊の宣伝効果とドイツ・ダンスの利用価値を知っていたヒトラーを後援者として歓

<sup>7</sup> *ibid.*, S. 60.

<sup>8</sup> M・A・フォン・リュティヒャウ「「狂気の極み」」河合哲夫訳, in『芸術の危機—ヒトラーと《頹廃美術》』アイメックス・ファインアート, 1995, 38頁。

迎した。ラバンはベルリン国立オペラの舞踊監督に就任し、ヴィグマンもくドイツ・ダンス・フェスティヴァル〉等で次第にナチスの美学に沿うようになる。1936年のベルリン・オリンピックの際、ラバンとヴィグマンは共に開会式用の壮大な群舞を振り付けるよう依頼されるが、ラバンはナチスに迎合しきれず亡命し、そのダンスがファシズムとの隠れた絆を持っていると言われたヴィグマンはドイツに留まった<sup>9</sup>。第一次世界大戦前夜のヘレラウでの生活は、そこに身を置いた者にとっては生存を巡る格闘を前に彼らが享受し得た貴重な平穏時代だったろうと思われる。

一方、ダルクローズにとってもヘレラウ時代は短かった。1914年2月にダルクローズ学校の校長ヴォルフ・ドールンが急死すると弟のハラルト・ドールンが校長職を引き継いで学校は無事夏期休暇を迎えが、ダルクローズがスイスに一時帰国している間に大戦が勃発してしまう。学校はサナトリウム〈白鹿〉と共に赤十字の衛成病院として接收され、次学期の開講が不可能になる。ハラルト・ドールンとダルクローズは学校運営について書簡により協議していたが、ドイツ軍によるフランスはランスの大聖堂への砲撃が各国で報じられると、スイスの芸術家及び作家たちが文化財を攻撃するというドイツ軍の野蛮な行為を非難して「ラ・スイス」紙に連名で抗議文を発表する。「ジュネーブ・プロテスト」として知られるこの抗議行動にダルクローズも参加していた。しかしドイツは大聖堂が砲兵隊の監視所として使用されていたことを指摘し、フランスこそ文化財の軍事的利用を禁止した交戦法規に違反したとしてフランスを非難する。が、フランスはこの事実を否定してさらにドイツ側を糾弾し、スイスがフランスの側に立ったためにドイツのメディアは一斉に「ジュネーブ・プロテスト」に対して反発した。特に誹謗の対象になったのはドイツにおいて作品発表の場を与えられていたフェルディナンド・ホドラーとダルクローズであった。彼らのドイツ批判は後援者に対する裏切り行為と

---

<sup>9</sup> Müller, Hedwig, Mary Wigman: Leben und Werke der großen Tänzerin, Quadriga Verlag, 1992.

見なされ、「恩知らずのホドラーとダルクローズ」、「過大評価されたドイツ文化中の下宿人」などという非難がドイツの各紙に載るようになる<sup>10</sup>。事態を重く見たハラルト・ドールンはダルクローズに抗議声明の撤回を懇願するが、ダルクローズはこれを拒否する。彼にとっては交戦法規がどうであれ文化財に対する破壊行為は赦し難い蛮行であり、そもそもドイツの知識人たちがなぜ戦争それ自体を非難しないのか理解し難かった。結局両者の溝は埋まらず、ダルクローズとヘレラウの契約は解消されてその協力関係には終止符が打たれる。戦後ダルクローズ学校は校名を変更し、ダルクローズとは無関係の組織として再出発を余儀なくされた。

#### 4. その後のヘレラウ教育施設

教育は田園都市ヘレラウにとって不可欠の要素であった。もとよりヘレラウ建設の際に創設者の念頭にあったのはゲーテが『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』に描いたような“教育州”であり、特に芸術教育は生活改革運動の理念においても重要な事業であった。ヘレラウの教育施設はダルクローズを失った後も、リズムと音楽と身体教育のためのヘレラウ新学校 (Neue Schule Hellerau für Rhythmus, Musik und Körperbildung) となって1919年にリトミック教育を再開する。ダルクローズ学校の卒業生で新学校の教育責任者となったE. Th. フェラント-フロイント (Ernst-Thomas Ferand-Freund, 1887-1972) は教師として優秀で、祝祭週間も挙行し学園の創造的雰囲気をよく保ったと言われているが、戦後の経済困難もあって経営は容易ではなく、ハラルト・ドールンは他の学校も施設に誘致して経営の多角化を図らねばならなかった。ちょうど新校舎を探していた近隣の私立高等学校に校舎の一部が貸し出され、同時にアレクサンダー・サザーランド・ニール (Alexander Sutherland Neill, 1883-1973) のインターナショナル・スクー

---

<sup>10</sup> Lorenz, Karl, Wege nach Hellerau, Dresden, 1994, S. 136.

ルが新たに開設されることになった。後にフリースクールの創設者として世界に知られるようになるニールだが、当時彼の自由主義教育はまだ実験段階であった。ドイツの自由主義教育者たちはヘレラウ建設当時からこの田園都市に関心を寄せており、この時イギリス人のニールを招いて共同で自由主義教育を実践することになる。有名なくサマーヒル学園 (Summerhill School) の原型とも言うべきヘレラウの〈国際自由学校〉にはヨーロッパ各国から生徒が集まり、ダルクローズ学校に代わってヘレラウに活気をもたらすものとなった。この時ヘレラウ教育施設では上記の3つの学校が合併したかたちとなり、リトミック・工芸教育・一般教育を三本柱とする教育が成立する<sup>11</sup>。一時期ヘレラウを離れていた建築家のハインリヒ・テッセノウもハラルト・ドールンの要請を受けて1919年にヘレラウへ戻り、ヘレラウの工芸技術の向上に努めていた。ヘレラウに育ち、後年著名なトーマス・マン研究者となるペーター・ド・メンデルスゾーン (Peter de Mendelssohn, 1908-1982) の回想<sup>12</sup>を読むと、この時のヘレラウにはゲーテの描いた“教育州”的な雰囲気がある程度漂っていたものと推測される。

1914年に初めて訪れて以来この田園都市に関心をもち続けたフランツ・カフカは、ダルクローズに会う機会はなかったものの肉体的な羞恥心の克服に役立つものとしてリトミックのメソッドに関心を持っていた。彼は妹ガブリエーレの二人の子供たちを新ヘレラウ学校に通わせたいと考えていたが実現せず、失望の気持ちをR. クロップシュトック宛の手紙に記している<sup>13</sup>。

<sup>11</sup> Fasshauer, Michael, *Das Phänomen Hellerau*, 1997, Dresden. S. 220.

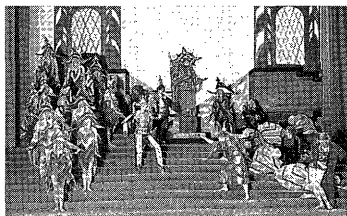
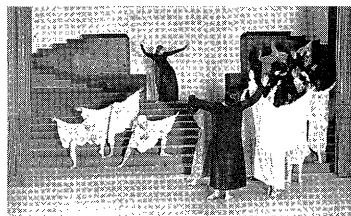
<sup>12</sup> Mendelssohn, Peter de, *Hellerau: Mein Unverlierbares Europa*, Dresden, 1993.

<sup>13</sup> カフカの手紙(1922年9月〔日付なし〕)。ヘレラウのに対するカフカの関心はリトミック教育以外にも及んだ。フェリーツェ・パウアーとの婚約時代には、カール・シュミットの工場で作られる「簡素で非常にしっかりした」家具を買うよう彼女に指示している。また1922年には、後にカフカの最後を看取ることになる友人のローベルト・クロップシュトックを〈ヘレラウ出版〉に就職させたいと願い、ヘーグナーに友人の雇用を依頼している。この計画は結局実現しなかったが、その後もカフカは手紙に「我々のヘレラウに対する関心は分かちがたいものがあ



この学校合併体はしかし短命で、1923年にはドイツにおける自由主義教育の限界と経済的困難の両方に直面したニールがドイツを去る。また1925年にはウィーン市がフェラント-フロイントに好条件を提供したため、リトミック学校は〈新ヘレラウ・ラクセンブルク校 (Neu Hellerau in Laxenburg)〉となってウィーン郊外のラクセンブルクへ移転し、ヘレラウにおけるリトミック教育の系譜はここで途絶えてしまう。

大きな祝祭劇場を持つ施設の校舎は、その後しばらくベルリンの学校のセミナーハウスや催し物会場、または工芸家や芸術家のアトリエとして貸し出されていたが、ハラルト・ドールンの奔走によって1929年に労働省との交渉が成立し、〈国立福祉学校〉がベルリンから誘致される。そこではドレスデンの〈ドイツ衛生博物館〉の職員が保健学を教えることになった。この衛生先進都市ドレスデンならではの采配によってヘレラウの学校は“新しい人間性”のための身体訓育という目的にかろうじて奉仕し続けたとも言えるが、しかしその時期も長くは続かなかった。



齊藤佳蔵と石井漢が訪れたヘレラウ新学校の祝祭週間 (1923)

## 5. ヘレラウの社会主義者たち

ヴァイマル時代の重要な回想録として知られるハリー・ケスラー伯爵の日記に登場するヘレラウは、のどかな教育州といった趣ではない。1931年1

---

る」と記している。(クroppシュトック宛, 1921年6月〔日付なし〕)。

月31日の記述中では「ヘレラウの人々も、つまりパウル・アードラーのような詩人その他の人々だが、すっかりスパルタクス団の側についてしまった、フォーゲラーをはじめプレーメンのヴォルプスヴェーデの連中も同様だ」というフォン・ノスティッツの談話が紹介されている<sup>14</sup>。ドイツ最初の芸術家コロニーであるヴォルプスヴェーデの中心であったハインリヒ・フォーゲラー宅の〈バルケンホーフ〉は、この時確かにコミュニストやアナーキストのコミュニオンと化していた。ヘレラウの住民の第一次大戦前後における左翼化も、看過すべからざる田園都市の歴史の一面である。

フォン・ノスティッツが言及したパウル・アードラー (Paul Adler, 1878-1946) はプラハ生まれのユダヤ人で、14カ国語を解し、フロベールやクロードル、ヴァレリー等のフランス文学やさらには日本文学研究書<sup>15</sup>をも翻訳出版している碩学の士であった。ヘレラウでは地元の〈ヘレラウ出版 Hellerauer Verlag〉から文芸雑誌を出したり自宅で文芸サロンを開いたりしており、アードラーの居場所は“神聖な後光に包まれているかのよう”だと言われるほど<sup>16</sup>、彼は芸術家コロニーの精神的支柱として認められていた。アードラー自身の詩的散文集や小説はしかし『魔笛』<sup>17</sup>、『異神』<sup>18</sup>といった題名が暗示する通り秘義的要素に満ちており、読者層が限られていたため、現在アードラーの名はプラハ出身のドイツ語文学者という文脈において知られる程度である。実際彼は同郷のカフカやその友人の作家たち、ヨハネス・ウルツイディール (Johannes Urzidil, 1896-1970)、フランツ・ヴェルフエル (Franz

<sup>14</sup> Graf Kessler, Harry, Tagebücher 1918-1937. Frankfurt a.M. 1996. S. 116.

<sup>15</sup> Adler, Paul, Japanische Literatur: Geschichte und Auswahl von den Anfängen bis zur neusten Zeit, Frankfurt am Main, 1926. [Der Inhalt ist zum größten Teil eine Übers. von: Anthologie de la Littérature japonaise des origines au XXe siècle von Michel Revon, Paris, 1910.]

Adler, Paul, Sachwörterbuch zur japanischen Literatur, Frankfurt am Main, 1926

<sup>16</sup> Sarfert, *ibid.*, S. 69.

<sup>17</sup> Adler, Paul, Die Zauberflöte, Dresden, 1916.

<sup>18</sup> Adler, Paul, Elohim, Dresden, 1914.

Werfel, 1890-1854) 等と親交を結んでおり、ウルツィディールの『プラハ・トリプティック』<sup>19</sup>に収められた自伝的作品の中には個性的なアードラーが登場する。またカフカの手紙からは、彼がアードラーの存在から何らかの圧迫感を感じつつもその善意を高く評価していた様子を窺うことができる<sup>20</sup>。

第一次世界大戦が勃発するとアードラーは納税と兵役を拒否して反戦行動に出るが、そこには彼より一年早く1911年からヘレラウに住んでいたオットー・リュール (Otto Rühle, 1874-1943) の影響があったと言われている<sup>21</sup>。ザクセン州の教育者で「ドイツのペスタロツィ」と呼ばれたオットー・リュールは1912年からドイツ社会民主党の帝国議会議員を務めていた。議会ではカール・リープクネヒト (Karl Liebknecht, 1871-1919) の同士とも言うべき存在で、第一次世界大戦勃発の際、二人は共に社民党中の反戦派であった。リープクネヒトを反戦の象徴として有名にした戦時公債法案採択の際、リュールは採決を棄権してはいるが、その後彼はスパルタクス団に加わり、1918年にはリープクネヒトと共にドイツ共産党を創設している。リュールは精力的な街頭演説家で、一時期ヘレラウにアトリエを持っていたコンラート・フェーリクスミュラー (Conrad Felixmüller) の「アジテーター (Der Agitator)」はリュールを描いたものである。1919年のドレスデン市街戦の際に逮捕され、リープクネヒト等を失って不安定になった共産党から離脱した後、リュールは著述家となって労働者のための教育や文化政策の必要性を説いた多くの著書を著した。また亡命後はメキシコのトロツキーの下に赴き、メキシコ教育省で働いたことでも知られている。彼の大著『カール・マルクス：生涯と作品』<sup>22</sup>は、ヤーコプ・ヘーグナーの〈ヘレラウ出版〉から独立したヘレラウ第二の出版社とも言うべき〈アヴァルン出版社 (Avalun Verlag)〉から刊行されている<sup>23</sup>。

<sup>19</sup> Urzidil, Johannes, Prager Triptychon, 1960.

<sup>20</sup> カフカの手紙, クロップシュトック宛, 1921年9/10月〔日付なし〕。

<sup>21</sup> Sarfert, *ibid.*, S. 82.

<sup>22</sup> Rühle, Otto, Karl Marx : Leben und Werk, Hellaerau, 1928.



コンラート・フェーリクスミュラー「アジテーター」(1920)



パウル・アードラー

リューレは1917年にヘレラウを離れているが、社会主義の教育者として彼がヘレラウに与えた影響は大きかったと言われている。リューレとアードラーとは親しい友人で、後者は前者の強い勧誘にも拘らず社民党員とはならなかったものの、ドイツ革命後は共にドレスデンの労兵レーテに参加している。他にもヘレラウからの労兵レーテ参加者として知られているのは、美術収集家および芸術家のパトロンとして知られるビーネルト家の息子、フリードリヒ・ビーネルト (Friedrich Bienert) である。ビーネルトはヴィグマンの弟子で後に有名なダンサーとなるグレート・パルッカ (Gret Palucca) と結婚し、ヘレラウに住んでいた。ビーネルト家との縁により、フランツ・マルク、オスカー・ココシユカ、ヴァルター・ハーゼンクレーヴァー、コンラート・フェーリクスミュラー、オットー・ディクスらの芸術家たちがヘレラウを訪れ、作品の制作や発表を行っていた。1914年以前にはフェルッチョ・ブゾーニも2年間ヘレラウに住んでいる。フリードリヒ・ビーネルトも両親同様に若き芸術家を支援し、特に〈ドイツ革命的造型芸術家連合 (Assoziation Revolutionärer Bildender Künftler Deutschlands)〉に積極的に関与した<sup>24</sup>。

<sup>24</sup> Henry Jacoby und Ingrid Herbst, Otto Rühle, Hamburg, 1985, S. 23-81.

ヘレラウの人間が“すっかりスパルタクス団の側についた”という主張には多少の誇張があろうが、確かに社会主義思想はヘレラウの共同体全体に大きな影響を与えていたようである。この頃田園都市の3つの経営部門中、賃貸住宅を管理経営する「ヘレラウ建設組合」では組合員の大半が社民党の支持者であり<sup>25</sup>、また祝祭劇場では社民党の後援による青少年のための催しが毎年開催されていた<sup>26</sup>。ドイツ革命の際、ヘレラウ新学校の生徒であった上述のペーター・ド・メンデルスゾーンとヴォルフ・ドールンの遺児、クラウス・ドールンは「社会主義者の学徒」を名乗り、ヴィルヘルム二世を批判したピラを学内で配布しているが、「皇帝はもはや決してドイツを再建することはない。社会主義者のみがドイツを再建するのだ。諸君、肝に銘じるべし！」<sup>27</sup>と書いた彼らがせいぜい11歳そこそこであったことを思うと、当時のヘレラウの高揚した政治的雰囲気を推し量ることができよう。ヴァイマル時代にはヘレラウにも共産党の地方支部ができた。ドイツ帝国時代の代表的な芸術家コロニーであるヴォルプスヴェーデとヘレラウが、共にスパルタクス団や労兵レーテと関わっていたことは記憶されてしかるべきであろう。

しかしレーテ運動の敗北やドイツを襲った深刻なインフレを経た後も、田園都市の世界改革的雰囲気が持続したとは考え難い。特にインフレは田園都市の構造的成長にとっても致命的な打撃となった。1923年、「ヘレラウ建設組合」は約340戸の住宅を組合員に売却している。彼らの個人資産に対する志向を尊重すると同時に組合の経営安定を図ることが目的だったとは言え、カール・シュミットによるとそれは「持てる者と持たざる者」の差異を拡大する結果となった<sup>28</sup>。また当初予定された建設計画は縮小を余儀なくされ、小

---

<sup>24</sup> Sarfert, *ibid.*, S. 81.

<sup>25</sup> Rosseger, S. 45.

<sup>26</sup> Fasshauer, *ibid.*, S. 211.

<sup>27</sup> Sarfert, S. 66.

<sup>28</sup> Rössger, Mirjam, Die Baugenossenschaft Hellerau Zwischen Tradition und Neubeginn — Die Deutschen Werkstätten Hellerau heute, in: *Dresdner Hefte*, Jrg. 15, Heft 51, Dresden, 1997, S. 45.

規模住宅に住む労働者家庭の成長に合致するよう計画されていた中規模住宅の建設が困難になった。それは単に物理的な縮小というよりも田園都市構想の部分的断念を意味していた。当初グランドデザインを担当したリーマージュミットはヘレラウの事業から手を引き、その後任とも言うべきテッセノウもインフレの影響により1926年に〈ヘレラウ手工業者協会〉を解散して田園都市を去った。グスタフ・リュエデッケ (Gustav Lüdecke)、パウル・ノイマン (Paul Neumann) といった建築家たちがヘレラウに住んでその後の建設事業を担ったものの、芸術鑑査委員会はすでに機能しておらず、共同体の統一的概観を保つことは困難だった。そして1925年以降はリトミック学校も存在していなかった。

ヴォルプスヴェーデの〈バルケンホーフ〉はその後少年のための〈労働者学校〉、そして国際赤色救援会の〈子供の家〉と変貌していくが、ヘレラウにはヴォルプスヴェーデとは違う運命が待っていた。

## 6. ヘレラウの「進歩的反動」

生活改革運動の世紀転換期当時の理想には、階級も民族もなく個人の幸福を目指す平等主義的な雰囲気があった。ヘレラウが育成を目指した“新しい人間”も、人種や階級とは無縁のユニヴァーサルな性格があった。が、1918年以降のドイツでは様々な現象がイデオロギー色を強め、次第に主義や教義の対立が表面化してくる。田園都市もイデオロギーの対立から自由であるはずがなく、むしろこの外界から比較的隔離された新しい共同体を自らの理想実現の格好の場として見る様々な主義者たちを惹きつけた。中でも徐々に勢力を増してきたのは民族主義や新ロマン主義等の反動勢力であるが、彼らのプログラムには大都市批判や過剰な商業主義への対抗など、生活改革理念によれば進歩的とも言える方向性を併せ持っていた。20年代のヘレラウを特徴づけるのは、これらの「進歩的反動」<sup>29</sup>である。

ヘレラウにおける民族主義の拠点はハインリヒ・プードア (Heinrich

Pudor, 1865-1941) とブルーノ・タンツマン (Bruno Tatzmann, 1878-1939) が興した〈ハーケンクロイツ出版社〉であった。プードアは裸体主義の著述家で<sup>30</sup>、1901年から体力増進のための雑誌「力と美 (Kraft und Schönheit)」を発行していたが、その関心が次第に精神の強化という観点に重心を移していく過程でタンツマンの民族主義的思想と共鳴し、二人は1912年からヘレラウに住んで独自の教育事業を開始する<sup>31</sup>。特に実践役を担ったのはタンツマンで、彼はヘレラウにやって来るとまず「ドイツ市民大学同盟 Deutscher Volkshochschulbund」と「ドイツ市民大学職業紹介所 Ein Arbeitsamt für deutsche Volkshochschulen」という二つの機関を作り、〈ハーケンクロイツ出版社〉を拠点にした宣伝活動を始める。市民大学は20世紀初頭からドイツ各地で徐々に開校されつつあったが、タンツマンは特に民族主義的な思想の絆によって市民大学間の連携に関与したいと考えていたようだ。ドレスデンの裸体主義者カール・ヴァンゼロウ (Karl Vanselow) によって発行されていた雑誌「美 (Schönheit)」のヘレラウ特集号 (1922年) において、作家のハンス・ホルスト・クライゼルが「市民大学の努力 (Die Volkshochschulbestrebungen)」という論考の中で次ぎのように書いている。「現在の市民大学を真に民族の指導者 (Führer)<sup>32</sup> を作るための学校に仕上げなければならない。それはユニヴァーサルな知識を伝える大学よりもある意味では高次元にある教育機関である。ハンブルクのフィヒテ協会とヘレラウの〈ドイツ市民大学職業紹介所〉がそのための努力をしている<sup>33</sup>。」さらにプードアとタンツ

<sup>29</sup> Hermand, Jost, Der alte Traum vom neuen Reich, Frankfurt am Mein, 1988, S. 65ff.

<sup>30</sup> Krabbe, Wolfgang R., Gesellschaftsänderung durch Lebensreform. Göttingen, 1974, S. 95f.

<sup>31</sup> Pudor, Heinrich, Erziehung ohne Bücher, in: Die Schönheit, 18. Band, Heft 3, S. 37-39.

<sup>32</sup> ヒトラーの称号として使われる「総統」もドイツ語では「指導者」という意味の Führer である。

<sup>33</sup> Kreisel, Hans Horst, Die Volkshochschulbestrebungen, in Die Schönheit, 18. Band, Heft 3, S. 149-155.

マンは、ヘレラウを“新しい帝国の礎石”と考えていたと言う。“帝国のための指導者の育成”は、ヘレラウの本来的な教育プログラムとは無縁のものである。しかしこの当時はドイツが“ヴェルサイユの屈辱”に耐えていた時期であり、“新たな指導者”と“新たな帝国”の誕生を希求する声がドイツ全体に広がりつつあった。またタンツマンは1917年に「農民大学 (Bauernhochschule)」を開校し、「すべての文化は農業から発する」というモットーのもとに国民にとっての農業の重要性と郷土愛を説く教育を始めている<sup>34</sup>。ハインリヒ・ヒムラーに賞賛されたこの農民教育運動はこの時代のドイツにおける農本主義の台頭と合致した動きであり、この農本主義はたいいていの場合人種主義と結びついていた。例えばヘレラウには農民大学の他に敬虔主義的ユートピストのフリードリヒ・シェル (Friedrich Schöll) とその支持者たちが1920年に建てた「フォーゲルホーフ (Vogelhof)」という施設があった。精神性に重きを置くキリスト教と自然志向の新ロマン主義、そして民族主義が混濁したその教育プログラムは、質素な暮らしとゲルマン的農業への回帰を理念としつつ青少年の“北方人種の徳”を高めることを目的としていた<sup>35</sup>。

田園都市ヘレラウの周辺の緑地帯が「血と大地」のイデオロギーによって利用されるという事態が徐々に出来る。そしてこれらの民族主義的・人種主義的プログラムをさらに押し進めた「アルタマーネン開拓農地運動」がヘレラウに開拓支部を持つようになる。この運動の母体は人種主義者のヴィリヴァルト・ヘンツェル (Willibald Hentschel) によって1923年に始められた「アルタム同盟 (Bund Artam)」で、“アルタム (Artam)”とはインドの太陽神であるアルタムに倣ったものである。当時の人種主義者たちは好んで、インドはアーリア人の故郷、その太陽神はゲルマンの神々の原型と考えていた<sup>36</sup>。それはまた墮落したラテン系諸国とその文明からの完全なる離脱をも

<sup>34</sup> Fasshauer, *ibid.*, S. 256.

<sup>35</sup> Sarfert, *ibid.*, S S. 92; ジョージ・L・モッセ『フェルキッシュ革命』柏書房, S. 165f.

<sup>36</sup> 同上, S. 127.



意味し、“アルタマーネ (Artaname)” という言葉にはさらに“郷土を守る者”、“東部勢力と闘うドイツの戦士” という意味が付加された<sup>37</sup>。ヘンチェルはドイツにおいてダーヴィニズムを広めたエルンスト・ヘッケルの弟子で、1896年に世界で最初に田園都市理論を発表したテオドール・フリッチュ (Theodor Fritsch) の親友でもある<sup>38</sup>。過激な反ユダヤ主義者であったフリッチュの田園都市理論は発表当時その民族主義的傾向ゆえにドイツ田園都市協会に敬遠されて実現化を見なかったが<sup>39</sup>、その入植理論はその後ヘンチェルによって推進され、1924年結局ヘレラウの土壤に受け入れられることになった。

ハインリヒ・プードアもフリッチュと親しかったこともあり、結局思想を同じくするヘレラウの進歩的反動主義者たちは次第に共闘態勢を組むようになる。農民大学のブルーノ・タンツマンは〈アルタマーネン〉をも指導するようになり、ヘレラウを〈東部<sup>ル</sup>境<sup>ル</sup>地方〉と捉えるスローガンを発動するようになる。それは東方から進入してくる低価値の異民族に対し、ヘレラウなど東部<sup>ル</sup>境<sup>ル</sup>地方が防波堤となってドイツ古来の土地を防衛すべしという国土保全思想であった。1927年にタンツマンらが発表した「緑のマニフェストと労働の作戦行動」という名の声明には、“東部<sup>ル</sup>境<sup>ル</sup>地方を農村の労働によって補強し、国家間の主張が衝突する際の武器とする” という主旨が盛り込まれている。ヘレラウは農本主義的・人種主義的な植<sup>コロ</sup>民<sup>ニ</sup>地<sup>ニ</sup>構<sup>ニ</sup>想<sup>ニ</sup>に備わる二種の異なった目的、つまりドイツ国民の中から〈北方的〉な遺伝子を育成しようとする人種育成目的と、生存圏拡大のための東部進出目的の両方を同時に満たす理想的な植<sup>コロ</sup>民<sup>ニ</sup>地<sup>ニ</sup>となり、さらには農民大学や〈フォーゲルホーフ〉などで

<sup>37</sup> Hermand, Jost, Der alte Traum vom neuen Reich, Frankfurt am Mein, 1988, S.141ff; Linse, Ulrich (Hrsg.), Zurück, o Mensch, zur Muttererde, München, S. 327ff; Bergmann, Klaus, Agrarromantik und Großstadtfeindschaft, Meisenheim, 1976, S. 247ff.

<sup>38</sup> モッセ, 同上, S. 154.

<sup>39</sup> 副島美由紀「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(3) — E・ハワードに先んじたドイツの田園都市構想」, 小樽商科大学「人文研究」第1003輯, 2000, S. 179-209.

労働と手仕事に加えて軍事訓練が施されるようになっていった<sup>40</sup>。

他方では民族主義に染まらぬ農業改革の成功例も存在した。その推進者はヨハネス・ショメールス (Johannes Schomerus) である。ショメールスは本来営業目的でヘレラウへやってきた商人であったが、田園都市思想に感化され、特にその緑地帯の利用法に注目するようになる。彼はルドルフ・シュタイナーが唱道したバイオダイナミック (有機力動) 農業の方法を取り入れ、有機的果樹栽培と造園の技術改革に努めた。ショメールスは有機農業の本も多く著し<sup>41</sup>、ザクセン州の果樹園経営団体の顧問等も務めた。また彼の指導によりヘレラウの住民による果樹の市場出荷もなされている。今日ではバイオダイナミック農業はオルタナティブ農業として世界的な支持を得ているが、ショメールスはそのパイオニアの一人であると言える<sup>42</sup>。

アルタマーネンの存在はヘレラウにおけるナチズムへの円滑な移行を意味していた。この民族主義的・国粋主義的な開拓グループはユートピスト集団の中では最大のものであり、しかも 1927 年の段階でアルタマーネン開拓民の 70 パーセントがすでにナチ党员であったと言われている。アルタム同盟に属していたナチ指導者の中にはハインリヒ・ヒムラーとヤドルフ・ヘス等がおり<sup>43</sup>、またタンツマンはヒトラーから終身年金の榮譽を授かっている。ヘレラウにはナチ党の地方支部ができ、ドイツ共産党の支部としばしば摩擦を起こした。しかし形勢は明らかで、例えば 1933 年にアードラーがナチスの突撃隊メンバーに襲われて殴打される事件があり、彼はヘレラウを去って故郷のプラハへ引き揚げていく。ナチ党の政権掌握と前後して多くのユダヤ系、非ユダヤ系の芸術家、医者、作家たちがヘレラウ、あるいはドイツを去って行った。やはりユダヤ人であったヤーコプ・ヘグナーはスイスへ、メンデルス

<sup>40</sup> Fasshauer, *ibid.*, S. 258.

<sup>41</sup> Schomerus, Johannes, *Die biologisch-dynamische Wirtschaftsweise im Obst- und Gartenbau*, Düsseldorf, 1932.

<sup>42</sup> Fasshauer, *ibid.*, S. 255.

<sup>43</sup> Hermand, *ibid.*, S. 142.

ゾーン家はイギリスへ移住している。〈ドイツ工房ヘレラウ〉のカール・シュミットを除いて、田園都市の動力となっていた人々は皆ヘレラウを去って行った。

かつてダルクローズ学校であった教育施設もさらなる変化を被る。1931年、ヘレラウ教育施設は国立福祉学校に加え、〈ドーラ・メンツラー学校(Dora-Menzler-Schule)〉の誘致に成功する。1908年ライプツィヒに設立されたドイツで最も古い体育学校の一つで、校長のメンツラーは『貴方の身体の美しさ』<sup>44</sup>や『女性のためのリラックス運動』<sup>45</sup>といった著作によっても知られていた<sup>46</sup>。彼女はドイツの学校で行われていた形式主義的体育教育の批判者で、音楽やリズムと身体関係を重視しており、ヘレラウにおける身体教育の伝統を引き継ぐのに適した存在であった。校舎の半分を使って再び身体教育が開始されたが、ナチスが政権を掌握するとメンツラーが“半ユダヤ人”であったために学校は解散を命じられる。国立福祉学校もナチス政府により閉鎖され、他方では〈ドイツ衛生博物館〉の展示物が人種主義のイデオロギーに奉仕するようになる。ハラルト・ドールンは学校施設を政府に売却するしかなかった。ナチス政府はまず祝祭劇場を民族主義的・人種主義的演劇のための劇場として利用することを考えたがその計画を断念し、1937年に兵舎を増築して警察の施設とする。祝祭劇場は警察学校の体育館となるが、第二次大戦が勃発するとそれらもナチスの親衛隊の宿舎となる。かつて祝祭劇場の正面に彫り込まれていた陰陽印のダルクローズ学校の校章は、ハーケンクロイツにとって変えられる。

---

<sup>44</sup> Menzler, Dora, Die Schönheit deines Körpers, Stuttgart, 1924.

<sup>45</sup> Menzler, Dora, Entspannungübungen der Frau, Stuttgart, 1924.

<sup>46</sup> Sarfert, *ibid.*, S. 64.

## 7. ハラルト・ドールンと〈白バラ抵抗運動〉

田園都市ヘレラウ建設当初の高い理想が徐々に放棄されていく過程を考える時、ハラルト・ドールンの生涯とその最期を想起しない訳にはいかない。彼の死もまた、田園都市の歴史に関わる悲劇の一つとして捉えることができるからだ。

兄のヴォルフ・ドールンが1914年に不慮の事故で死亡した後、弟のハラルトは寡婦となった兄嫁と結婚し、田園都市株式会社とヘレラウ教育事業に関わる兄の責務を引き継いだ。その後20年間、ダルクローズとの決別やリトミック学校の転出など次々と困難に直面する学校運営の舵取りを行ってきたが、ナチスが政権を掌握すると学校施設をザクセン州政府に売却してヘレラウを離れる。その後彼はパリとベルリンで当時まだ新しい分野であったマッサージとリハビリ治療を学んだ後、1941年バイエルンの小村バート・ヴィースゼーで食事療法のサナトリウムを開く。ダルクローズのリトミックを学びサナトリウム〈白鹿〉の前例を親しく知っていたドールンにとって、新たなキャリアとしては自然な選択だったろう。その後二人の娘たちが合流し、そのうちの一人、ヘルタがある医学生と知り合い結婚する。その医学生が後に〈白バラ抵抗運動〉グループの一人となるクリストフ・プローブスト(Christoph Probst, 1919-1943)である。ナチスを嫌悪していたドールンがプローブストを通じて〈白バラ〉のリーダー、ハンス・ショル(Hans Scholl, 1918-1943)と知り合い意気投合するまでさほど時間はかからなかった。処刑された7人の一人であるヴィリー・グラーフ(Willi Graf, 1918-1943)の手記によると、ドールンとショルの二人をまず結びつけたのはフランシス・ジャム、ジョルジュ・ベルナノス、ポール・クロデルといったフランスの作家たちの名前であった。ショルが読んでいたこれらの作家は、パウル・アードラーの翻訳とヤーコプ・ヘグナーの出版業によって田園都市ヘレラウがドイツにもたらしたものであった。後に二人は文学についてのみならず、ナチスに対する抵抗運動について語り合うようになる。1943年2月、ドールンは



ドールン家。後列右が  
ハラルト・ドールン、  
その隣がヴォルフ・  
ドールン

シオル兄弟やプロプストを初め〈白バラ〉の闘士たちと共に逮捕されるが、〈白バラ通信〉配布の行動には直接参加しなかったのか、無罪判決を受ける。しかし釈放されたのも束の間、当局にとって要注意人物であったためか、敗戦が確実視された時ナチスの敗北に歓喜したことを隣人に密告されてもう一人の義理の息子と共に再逮捕され、ヒトラー自殺の前日に共にナチスの大管区長によって銃殺されてしまう<sup>47</sup>。

ハラルト・ドールンの死は〈白バラ〉グループのそれとして語られることはないが、田園都市における芸術教育継続のために費やされた20年の努力と、田園都市の活動によって反ファシズム抵抗グループ〈白バラ〉と結びつけられた絆は、精神的な運動としてのドイツ田園都市建設運動がもたらした結果の一つとして記憶されるべきであるように思われる。

## 8. 第二次大戦後のヘレラウ

カール・シュミットの家具工場〈ドイツ工房ヘレラウ〉は、1930年に一時

<sup>47</sup> Sarfert, *ibid.*, S. 123-125.

経営危機に陥り規模の縮小を余儀なくされたとはいえ第二次大戦前まで健在であった。しかし第二次大戦が始まると軍に接収されて軍需品生産工場となり、シュミットは工場の立ち入りさえも禁じられる。終戦後工場は東独政府に接収されて国营工場〈家具コンビナート・ドイツ工房ヘレラウ〉となり、国家の計画経済体制に組み込まれる。工場の存続は保証されたが量産主義的経営にあっては、職人やデザイナーが創造性を発揮する余地はもなや失われた<sup>48</sup>。

住民共同体としてのヘレラウは東独時代に入ると近隣の村落と共にドレスデン市に合併され、〈レラウ建設組合〉は改編・統合された新しい労働者住宅組合に編入される。しかし組合は官製的なもので、田園都市の住民による自主管理という色合いは消滅した。ヘレラウの建築的な調和体は1955年にドレスデン市の文化財として、1979年には東独国家の歴史的建築物として指定されたが、ヘレラウ建設当初の理念について語ることは社会主義体制の下ではユートピスト的、つまりエリート主義的であるとしてタブー視され、ヘレラウの田園都市としての記憶は住民の間でも次第に希薄になっていった。学校施設と祝祭劇場は戦後すぐに進軍してきたソ連軍に接収され、ドイツ統一までの45年間ソ連軍の兵舎として使用された。ハーケンクロイツの紋章は槌と鎌のそれに変えられたが、祝祭劇場は相変わらず兵士の体育館であった。

ドイツ統一後、ソ連軍の撤退も完了すると田園都市の歴史を知る内外の研究者や建築家たちのヘレラウへの関与が始まり、その再生が唱道されるようになる。特に記念碑的建築物である祝祭劇場の修復と再利用の可能性をめぐって〈ヘレラウの芸術文化のためのヨーロッパ工房推進財団 (Förderverein für die Europäische Werkstatt für Kunst und Kultur Hellerau e. V.)〉<sup>49</sup>が結成され、1994年にザクセン州から施設を買い取って修復・運営事業にあ

---

<sup>48</sup> Straub, Fritz, Zwischen Tradition und Neubeginn — Die Deutschen Werkstätten Hellerau heute, in: Dresdner Hefte, Jrg. 15, Heft 51, Dresden, 1997, S. 51.

たっている<sup>50</sup>。現在祝祭劇場の修復はほぼ完了し、ダンスや展示会等の催しを行う貸しホールとして運営されている。また〈ドイツ工房ヘレラウ〉は多くの旧東独の企業と同様に信託公社を通じて1992年に旧西独の企業に売却され、現在では家具工場と博物館、ホール等を備えた複合的工場施設となっている<sup>51</sup>。

しかしこれら二つの施設が新たに稼働したとしても田園都市の精神が復活した訳ではない。ドイツ統一当時〈ザクセン住宅協同組合ドレスデン〉に属していた世帯は大半が住宅を売却した。経済的困難に加え、文化財指定を受けた家屋に住むことの不便さも住宅売却の要因になっている。その後ヘレラウに出来したのは労働者の手が届かないような高価な住宅群で、住宅改革は行われても土地の公有化という田園都市構想の不可欠な理念は蘇生の不可能な“昨日のユートピア”となっている<sup>52</sup>。

## 9. “明日の田園都市”

20世紀の初頭、ドイツの主な都市に〈田園都市協会〉が誕生し、“田園都市”は人々にとって魅力的な言葉となった<sup>53</sup>。第一次世界大戦前には、ヘレラウの他にもマンハイム、カールスルーエ、ニュルンベルク、ヒュッテナウ等に田園都市と呼ばれる住宅地が誕生したが、それらはいずれも田園郊外（ガーデン・サバープ）と呼ばれるべき小規模なものであった<sup>54</sup>。第二次世界大戦後、大都市の成長によって必要とされたのは田園郊外や衛星都市であり、本格的

<sup>49</sup> ドイツの持ち家文化を推進する「ヴェステンロウ財団」、「ハインリヒ・テッセノウ財団」、ザクセン州の文化庁が支援母体となった。

<sup>50</sup> Hähle, Wolfgang, Probleme der Denkmalpflege, in: Werner Durth (Hrsg.), Entwurf zur Moderne, Stuttgart, 1996.

<sup>51</sup> Straub, *ibid.*

<sup>52</sup> Rössger, *ibid.*, S. 46.

<sup>53</sup> 副島美由紀「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史(1)——世紀末の生活改革運動」, 小樽商科大学「人文研究」第96輯, 1998.

<sup>54</sup> Schollmeier, *ibid.*, S. 79ff.

な田園都市の建設構想を耳にすることはまずない。しかしドイツにおいて田園都市運動はただ放棄されたり断念された訳ではなく、ある意味ではそれは発展的に解消したとも言うこともできる。一つには住宅の改良によって改善された住環境があり、また他方では戦後ドイツの諸都市である程度緑化が実現されたり、〈シュレーバーガルテン〉と呼ばれる家庭菜園が普及して100年前ほど“田園”が必要とされなくなった状況がある。このような現在の状況を、世紀転換期以来の改革運動が“達成”した成果として見ることもできよう。では、人々が過去に存在した田園都市建設の試みを現在好んで回顧しようとするのはなぜだろうか。土地の公有化の可能性が信じられている訳ではない。住宅協同組合の活動が活性化されている様子もない。しかしヘレラウ再開の運動を、再利用価値のある建築物のみを修復し、何やら甘美な郷愁を呼ぶ共同体名にあやかって利益をあげようとする事業であると考え、恐らく間違いであろう。

ドイツ統一以来、多くの場でヘレラウの名が語られてきたが、そのような回顧の内的作業には、歴史の検証と記述の必要性、ある種の夢が存在した時代に対する郷愁という要素の他に、田園都市理念に付随する公平、協同、総合的な人間性の涵養といった精神性を継承していくことに対する欲求が存在するようにも思われる。E・ハワードの『明日の田園都市』(1902)から100年を経た今日まで、住環境改善の動きは自律的な田園都市以外にも「ニュータウン」、「田園郊外」、あるいは環境共生を目指した「サステナブル・シティ」、「エコヴィレッジ」等、多くの概念や試行を生み出してきた。成熟社会においては住民によるまちづくりへの参画が益々必要になるであろうし、また加速するグローバリゼーションに抗する意味でも開発利益の地域共同体への還元必要性が重要視されるとも考えられる。そのような意味においては、「開発利益のコミュニティ還元」を提唱したハワードの都市建設の理想像は、100年後の現在においても“明日の田園都市”であり続けているのだろう。そしてヘレラウ回顧の作業は、文化史・精神史、ひいてはユートピアの歴史の中に田園都市ヘレラウを一つの参照事項として確実に記述することにより、さらな



る生活改善に人々を誘う試みであると言えるだろう。

### 【その他の参考文献】

1. Dunsch, Lothar (Hrsg.), Hellaerau Almanach, Dresden, 1999.
2. Müller, Hedwig/Stöckemann, Patricia, „...jeder Mensch ist ein Tänzer.“, Gießen, 1993.
3. Arnold, Klaus-Peter, Vom Sofakissen zum Städtebau, Dresden・Basel, 1993.
4. Baumgartner, Judith, Ernährungsreform-Antwort auf Industrialisierung und Ernährungswandel. Frankfurt a.M., 1992.
5. Bollerey, Franziska, Architekturkonzeptionen der utopischen Sozialisten. Berlin, 1991.
6. Durth, Werner (Hrsg.), Entwurf zur Moderne, Stuttgart, 1996.
7. Fricke, Werner (Hrsg.), Die Zukunft der Stadt: Spurensuche in Dresden-Hellerau, Bonn, 1995.
8. Fritsch, Theodor, Die Stadt der Zukunft. Leipzig, 1896.
9. Howard, Ebenezer, Tomorrow: a peaceful path to real reform. London, 1898. (reprint, edited by Richard LeGates and Frederic Stout) London 1998. (1902年に Garden Cities of Tomorrow として再版される。)『明日の田園都市』長素連訳, 鹿島出版会, 1968.
10. Hartmann, Kristiana (Hrsg.), Im Grünen wohnen-im Blauen planen, Hamburg, 1990.
11. Kampffmeyer, Hans, Die deutsche Gartenstadtbewegung. Berlin, 1911.
12. Krückemeyer, Thomas, Gartenstadt als Reformmodell. Siegen, 1997.
13. Lahmann, Heinrich, Die wichtigsten Kapitel der natürlichen (physikalisch-diätischen) Heilweise, Wien, 1901.
14. Linse, Ulrich, Organisierter Anarchismus im Deutschen Kaiserreich von 1871, Berlin, 1969.
15. Susanne Roeßiger u. Heidrun Merk (Hrsg.), Hauptsache Gesund! Eine nostalgische Rückschau auf 100 Jahre Gesundheitsaufklärung, Heidelberg, 2000.
16. 東秀紀他『「明日の田園都市」への誘い』, 彰国社, 2001.
17. 長谷川章『世紀末の都市と身体』, ブリュッケ, 2000.
18. 海野弘, 『モダンダグンスの歴史』, 新書館, 1999.
19. 長谷川章『世紀末の都市と身体』, ブリュッケ, 2000.
20. 松沢慶信編, 『ドイツダグンスの百年』, 東京ドイツ文化センター, 1996.
21. フランク・マルタン, チボル・デヌス他著, 『作曲家・リトミック創始者 エミール・ジャック＝ダルクローズ』全音楽譜出版社, 1977, p.82.

## Eine Utopie der Moderne: Das Phänomen Gartenstadt in Deutschland (6)

— Die Wirklichkeit von heute und die Utopie von gestern —

Miyuki SOEJIMA

Seit der Wiedervereinigung Deutschlands ist der Name „Gartenstadt Hellerau“ auch in Japan öfter als zuvor von Wissenschaftlern erwähnt worden. Aber dabei wird meistens fast nur von der Anfangsphase und dem Glanzpunkt ihrer Geschichte erzählt, und es ist kaum erklärt, wie in der ersten Gartenstadt Deutschlands ihre ursprünglichen Ideen verloren gingen, was aber wichtig zu wissen ist, um das Phänomen Gartenstadt in Deutschland zu verstehen, denn es waren nicht so sehr Kriegsschäden und die Inflation als vielmehr Ideologiekonflikte, die den jungen Organismus in seiner gesunden Entwicklung beeinträchtigten. Es war aber eine wesentliche Aporie der Gartenstadt, ideologische Reibungen zu vermeiden, denn vom Konzept her sollte eine Gartenstadt ein Ort sein, „wo alle Reformideen der Zeit, mögen sie noch so gegensätzlich sein, am sichersten und gedeihlichsten zur Entfaltung und Gestaltung kommen können.

Das Konzept der Gartenstadt Hellerau beinhaltet drei Aspekte als Existenzbedingungen. 1) Der Betrieb »Deutsche Werkstätten Hellerau« als soziale Absicherung des Ganzen. 2) Eine Baugenossenschaft, die das Bauen der Wohnhäuser und die Benutzung des Bodens genossenschaftlich verwaltet. 3) Pädagogische Tätigkeit, die die Erziehung der Kinder zu einer „neuen Humanität“ ermöglicht und das kulturell-soziale Gemeinwesen belebt. Zu ihrer Blütezeit waren in Hellerau 2000 Einwohner, in der Dalcroze-Schule 500 Schüler aus 14 Ländern und in der

Künstlerkolonie insgesamt sieben Verlage.

Der erste Konflikt kam aber mit dem Krieg. Als der Erste Weltkrieg ausbrach, war Dalcroze in der Schweiz und unterzeichnete mit anderen Schweizer Schriftstellern und Künstlern den »Genfer Protest« gegen die Deutschen Truppen, die die Kathedrale zu Reims, ein Kunstdenkmal, beschossen hatten. Die Empörung kam dann von der Deutschen Presse. Sie warf Dalcroze, der in Deutschland bedeutende Förderung gefunden hatte, Undankbarkeit vor. Dalcroze verweigerte den Vorschlag des Leiters der Hellerauer Schule zum Widerruf seines Protestes, weil es für ihn unverständlich war, warum die Deutschen nicht gegen den Krieg an sich protestierten. Die Mitarbeit mit Deutschland wurde ihm unmöglich, er kam nicht mehr nach Hellerau zurück. Die Hellerauer Bildungsanstalt ohne Dalcroze verlor Schwung und Impetus und konnte nur bis 1925 weiter existieren.

Die Inflation bot dann keine günstige Bedingung für die Hellerauer Gemeinde. Die Baugenossenschaft musste mehr als 300 Wohnungen verkaufen, um ihre Existenz zu sichern, wodurch aber die Solidaritätsgesinnung der Gemeinde geschädigt wurde. Die Künstlerkolonie war doch politisch aktiv, viele waren Sozialdemokraten und gehörten dem Dresdener Arbeiter- und Soldatenrat an. Beeinflussend für die Gemeinde waren die Schriftsteller wie Paul Adler und Otto Rühle. Letzterer war ein SPD-Reichstagsabgeordneter, ein Mitkämpfer von Karl Liebknecht und gründete mit ihm die KPD. Man sagte, Hellerau sei rot geworden. Auf der anderen Seite wurden aber auch die völkisch-nationalistischen Gruppen immer aktiver. Bruno Tanzmann z.B., der Inhaber des »Hakenkreuz-Verlag«, gründete aufgrund seiner völkisch-physiokratischen Idee eine Bauhochschule in Hellerau. Es entstand auch ein Landeserziehungsheim für Jugendliche mit einem agrarroman-

tischen Programm, das auf die Rückkehr zum germanischen Leben mit den Tugenden des nordischen Menschen hinzielte. Dazu kamen auch Siedlungsgruppierungen der »Artamanen«, den Vertretern des völkisch-nationalistischen Gedankenguts. Die nationalistischen Ideologen propagierten Hellerau als ein Vorbild der deutschen Ostmark, die durch Bauerndörfer gestärkte „Front des nationalen Behauptungskampfes“<sup>1</sup>. Die politischen Gegensätze verschärften sich in Hellerau durch die Ortsgruppen der KPD und der NSDAP und allmählich verließen jüdische und nichtjüdische Künstler, Schriftsteller, Reformlehrer und Ärzte Hellerau. Die Gartenstadt wurde dann von den Nationalsozialisten vereinnahmt. Die Bildungsanstalt wurde zuerst in eine Polizeischule umgebaut, und dann in der Kriegszeit als Kaserne der SS-Soldaten benutzt. Die »Deutschen Werkstätten Hellerau« wurde als Hersteller von kriegswichtigem Material enteignet. Eine Utopie der Moderne ging damit zu Ende.

Das Kriegsende bedeutete keine Neugeburt Helleraus. Die Bildungsanstalt wurde sofort von den Sowjetischen Truppen beschlagnahmt und bis 1990 als Kaserne der Roten Armee verwendet. Die Möbelfabrik bekam Karl Schmidt, der Eigentümer und Begründer der Gartenstadt, nicht mehr zurück, sondern sie wurde als volkseigener Betrieb verstaatlicht. Die Baugenossenschaft wurde unter dem starken Einfluss des Staates in eine neue Wohnungsgenossenschaft angegliedert. Von reformerischen Ideen zu reden wurde in der sozialistischen Gesellschaft als ein Zeichen des elitären Bewusstseins missbilligt, so verschwand allmählich das Hellerauer Gedankengut.

Seit der Wiedervereinigung Deutschlands entstanden neue

---

<sup>1</sup> In „Das grüne Manifest und der Feldzug der Arbeit“, von Bruno Tanzmann, 1927.

Initiativen. Ein paar westdeutsche Stiftungen bildeten zusammen einen Förderverein für Hellerauer Kultur, erwarben die Bildungsanstalt und führten die Sanierung aus. Die Anstalt ist heute in »Festspielhaus Hellerau« umbenannt und wird für kulturelle Veranstaltungen gemietet. Die »Deutschen Werkstätten Hellerau« wurden 1992 auch privatisiert. Auf traditioneller Basis sind sie heute in ein modernes Unternehmen der Möbelfertigung und des Innenausbaus umgemodelt worden. Aber die nach der Wende entstandenen Wohnhäuser sind für den einfachen Arbeiter oder Angestellten nicht erschwinglich. Die bodenreformerischen, genossenschaftlichen Ideen waren nicht mehr wiederbelebbar. Die heutige Zeit scheint nicht günstig für idealistische Visionen und Utopien. Oder man sollte sich fragen, ob sie nicht mehr nötig sind, ob man mit Oppenheimer sprechen kann: Alle Wirklichkeit ist die Utopie von gestern. Sonst sollte man schon an die Utopie von morgen denken.